

KEYWORD

全国高等学校
野球選手権大会

朝日新聞社と日本高等学校野球連盟の主催で、毎年8月に兵庫県の阪神甲子園球場で行われるトーナメント形式の野球大会。地方大会で勝ち上がった高校がこの「甲子園」で日本一を競い合う。

高

校生のみならず、大人も子どもも手に汗握る「甲子園」こと「全国高校野球選手権」。この一大イベントの審判は、社会人ボランティアが行っているって知っていましたか？

この夏、高松市生島町のサーパススタジアムで開催された「第91回全国高校野球選手権香川大会朝日新聞社 県高野連主催」に、香川大学法学部3年生の安藤秀明さんが審判デビューしました。現役大学生の審判は香川でも初めてのことで、全国的にも大変珍しいことなんです。

もともと中学生時代はソフトボール部で選手として活躍し、高校では野球部のマネージャーとして選手を支えていた安藤さん。香川大学に進学後は野球と離れた生活を送っていましたが、「野球に何らかの形で関わりたい！」という思いが再燃し、審判になろうと考えたそうです。

最初は大学生のうちに審判ができるとは思っていませんでした。安藤さんですが、高野連や母校の先生に相談したところ、学生のうちに審判をやれることが判明！「是非やってみては」という母校の後押しもあって、香川県の講習会に参加し、座学や動きの確認、試合形式の実践練習などで審判としてのスキルを身につけていきました。

「高校で一通りのルールは身につけていたものの、細かい部分、やったことがないポジションのルールなどもあり、頭で分かっているけど「現象が起こって咄嗟に対応できるか」というと難しいものがありました。練習試合では何度も失敗しましたが、試合前のミーティングや試合後の反省会で審判の皆さんからいただく指摘も勉強になり、大会で出場した5試合では、大きなミスもなく無事つとめられたと思います」

まだまだ課題は多いし3塁の塁審は楽な方なので、と謙遜しますが、もちろん審判として気を抜くことはできません。

「審判のジャッジ一つでトラブルになったり試合の流れが変わったりする。血のにじむような練習をしてきた選手のことを考えると、ボランティアとはいえないくらいプレッシャーを感じます。しかし全てをビデオ判定にしてしまうのは味気ないですよね、人間がやるからこそ面白さもあるのではないのでしょうか」

判定は時に難しく、責任は大きい。さらに真夏のマウンドは40度近くまで上がる過酷な環境です。それでも香川県だけで約40人の人が審判として登録し、ボランティアとして参加しているのは野球が好きだからにほかなりません。

「フィールドに入れるのは選手と審判だけ。選手に一番近いところで試合を支えられる所に審判のやりがい、面白さがあります。また、高校野球が地域を通して運営されているということに気付き、そこに関わることができたのは自分にとって大きな経験。地域に貢献したいという思いを強く持つようになりました」

選手として、マネージャーとして、審判として。成長することになった形で試合に関わり続けた安藤さんが見つけたのは、「野球を愛する多くの人たちの、色んな形のサポートで試合は成り立っている」という人と人との繋がり。そしてその輪に参加する喜びでした。就職しても審判を続け、野球に関わっていききたいという安藤さん。球児たちの夢の舞台は、こうやって受け継がれていく沢山の思いによって支えられています。

安藤秀明

PROFILE

あんどう ひであき
法学部3年



野球が好きだから 人と地域の力が試合を支える

九	十	合	計	H	E	失
0	0	0	0	0	0	高
2	3	0	0	0	0	高
PL	1B	2B	3B	LL	LR	
大	横	大	安			
黒	田	平	藤			
		哲				



全国高等学校野球選手権香川大会で、塁審を務めた安藤さん。メディアの注目も集めました。

**大学生 夏の高校野球香川大会で審判に
塁審で来月出場**
夏の高校野球香川大会（現地大会）が7月11日から始まる。高校野球の審判は社会人ボランティアで行われるが、香川大会では現役大学生の審判も初めて。香川大会を機に「審判」の思いが再燃し、審判になろうと考えた安藤さん。香川大学に進学後は野球と離れた生活を送っていましたが、「野球に何らかの形で関わりたい！」という思いが再燃し、審判になろうと考えたそうです。

トピックスとして、審判のやりがい、面白さがあります。また、高校野球が地域を通して運営されているということに気付き、そこに関わることができたのは自分にとって大きな経験。地域に貢献したいという思いを強く持つようになりました。選手として、マネージャーとして、審判として。成長することになった形で試合に関わり続けた安藤さんが見つけたのは、「野球を愛する多くの人たちの、色んな形のサポートで試合は成り立っている」という人と人との繋がり。そしてその輪に参加する喜びでした。就職しても審判を続け、野球に関わっていききたいという安藤さん。球児たちの夢の舞台は、こうやって受け継がれていく沢山の思いによって支えられています。

(2009年6月21日 朝日新聞 朝刊掲載)

KEYWORD

[高松ゆめ大使]

財団法人高松観光コンベンション・ビューローが主催し、1年の任期で任命する観光PR大使のこと。任期は1年で、現在は3人の大使がそれぞれ県内外のイベントに出席し、香川県高松市の魅力をPRしている。



高松ゆめ大使は、いわば高松のイメージモデル。魅力をより良く伝えるために、表情づくりなどの表現力も勉強中!



高松ゆめ大使 9代目
木村

公香

PROFILE

きむら きみか
工学部3年

動くほど世界は広がる

沢山の方に大好きな高松を伝えたい



大 学生になると、学生はそれまで以上に自主的に行動できるようになります。たとえば「一人暮らし」や、高校ではできなかったかもしれない「バイト」であったり。自分で考えて動くのは大変だけれど、動いた分だけ世界は広がっていきます。

ところでこの女性の爽やかな笑顔とたまたま、「どこかで会ったことがあるな...」と思いませんか。

彼女は工学部3年生の木村公香さん。岡山県玉野市出身の木村さんは、2007年、大学1年生の時に玉野市の魅力をPRする「ほほえみマリン大使」に任命され、1年間玉野市のPRを行っていたんです。また、県内のプライダル会社専属のモデルとして活動したり、家庭教師をしたり、卓球教室で子ども達を指導するアシスタントをしたりと学業と両立させながら、様々な学外活動にチャレンジしてきました。やっぱり、子どもの頃から社交的だったんですか？とかがうと...

「正反对です！高校ではバイトは禁止でしたし、そもそも人見知りだったので、今のようない仕事させてはいただいているという驚かれます(笑)」

高校の時には考えもしなかった活動に挑戦しようと思ったのは、もともとマリン大使をつとめていたお姉さんの影響。仕事と学業を両立させながら大使やモデル活動を行っているお姉さんの成長を間近で見たことが、引っ込み思案な木村さんを一歩前進させることになったのです。

さらにこの夏、「香川大学で3年間過ごしてきたことで大好きになった『高松』の良さを少しでも多くの人に伝えるお手伝いができれば...」という思いが応募につながり、木村さんは香川県高松市の観光をPRする『高松ゆめ大使』9代目の一人として選ばれています。

任命されてまだ数ヶ月ですが、木村さんはすでに他の大使2人とともに県内・県外の式典やイベントに出席しており、インタビュー前日は彦根のイベントに出席したばかり。活動の場を広げるその目に、高松はどんな地域として映っているのでしょうか。

「玉野もそうでしたが、高松の『海』が好きです。『海』があって、山がある」という恵まれた環境で当たり前前に生活している若い人が、その良さに気付かないまま県外に出してしまうのは勿体無い。私自身、イベントに出ることに高松の魅力を知っているので、皆さんにもぜひイベントに参加していただき、高松の良さを知ってもらいたいと思っています」

様々な仕事で人と接する経験は、木村さん自身の考え方も広げていきます。影響し、影響され。そんな相互作用を繰り返す中で、木村さんは普段から周囲に地域の魅力、高松の良さを話すようになっていきました。とくに今年の高松は『瀬戸内国際芸術祭2010』などの大きなイベントもひかえています。国内外から訪れる沢山のみなさんに高松をPRすることは、お客様だけでなく、いま高松に住んでいる人達や香川大学の学生にとっても高松の良さを再認識できるいい機会になりそうですね。

友達のマリン大使になったり、観光大使に10代の応募が増えたりと、木村さんの周りでも嬉しい変化が。自分の行動が、自分だけでなく周囲も変えていく。地域とつながる大学生の可能性は、こんな風に広がっています。